

- 1、 本日の聖書の箇所は、結婚披露宴の話です。いままで理解されてきたような解釈では、なんとなく気持ちが収まらない、“よくわからないたとえ話”なのです。この奨励のため、神さまに祈っていたらこの箇所が示されて、困ったなと思っています。いままでも、この箇所が説教で扱われたことは少なかったのではと思います。まず解釈をして見たいと思います。女性が、主な登場人物として語られるたとは少なく、このたとえは代表的なもの。
- 2、 10人の乙女が結婚の祝宴に新郎を案内するため、でてくるのを待っていた。5人は賢い乙女、5人は愚かな乙女だった。祝宴は夜なので、油で燃やす、ともし火（ランプ）をもっていた。賢い乙女は、ツボに入れた補給用の油を持っていた。愚かな乙女は、持っていなかった。花婿が出てくるのが予定よりかなり遅くなったので、油が足りなくなった。愚かな乙女たちは、賢い乙女に油を分けてくださいと言ったが、断られた。それで町に油を買いに行った。そのため祝宴に遅れて着いたが、主人は拒否し、入れてもらえなかった。ということがこのたとえのあらすじです。新婦はまったく登場しません。この解釈を、これはいつ来るかわからない再臨の神様が、いつ来てもいいように備えていなさいという話だと。新郎は、再臨の神様、油は信仰をあらわすので他の人に分けてあげることができない。愚かな乙女は不信仰なので、天の国に入れてもらえないという解釈です。愚かな乙女たちは、経験が浅かったか、気の利かない人々だったかかもしれません。貧しくて補給用の油を買えないひとびとだったかも。賢い乙女たちは、このような弱いものに目を留めていない、隣人・友人同士の助け合いもない。夜中に、わざわざ油を買って婚宴に行ったのに主人に入れてもらえない。これは神様のイメージに合わないような気がします。いままでの解釈では、なんとなくそうかなと思いつつも、居心地の悪い天の国のたとえだという気がします。このたとえ話は、分かりやすい、身の回りにいつもあるような話なので、聞いていた人々は、すんなりと受け止めていたのでしょうか？  
女性のみなさんは、賢い乙女に自分を重ねますか、愚かな乙女に自分を重ねますか。皆さんは、賢い女性だから問題ないですかね。鍋料理をしていて途中でガスボンベのガスがきれ、買い置きもなかったということはありますか？
- 3、 まず、当時の結婚式・祝宴はどんなだったかをみたいと思います。祝宴は、通常は、夕方から新郎の家で行っていたそうです。その日は、新郎が新婦の家に行って結婚契約を交渉し、完了してから新婦を新郎の家に案内する。契約は、離婚の条件、死別した時の支払い金額、条件等を約束した。そのため交渉が長引き、予想外に遅れることがあったようです。だから、待ちくたびれた乙女たちは、皆眠ってしまったのだとおもいます。

新郎は、新婦を連れて祝宴のために、歌と踊りで、にぎやかに行進していく、そのとき新婦の付添人が明かりを照らしながら進んでいったそうです。乙女たちとは、このような人で、新婦の友達で

12歳~13歳くらいの乙女だったそうです。結婚は12歳からできたそうです。この付添人は、祝宴の招待客だったそうです。このことから考えてみると、友人同士とおもう乙女たちが、どうして油を融通しなかったのか。賢い乙女たちの態度は、世間で期待されている役割を完全に行うことを優先し、困っている人に思いやりを持たずに切り捨てているように思います。主人は、招待客である乙女たちをなぜ、私はお前たちを知らないと言って祝宴に入れなかったのか。見知らぬ旅人すらもてなす生活習慣のあるイスラエルで（創18：1~8）、あまりにもホスピタリティのない態度にみえます。イエスさまは、このたとえ話を違う意味で語ったのではないかという気がします。イエスさまが、語っているたとえ話は、民衆の日常生活に身近なことを用いながら、この世で常識とされているよう物の見方・価値観への問いかけを持つものが多いからです。「ぶどう園の労働者のたとえ」などを思ってみるとよくわかります（マタイ20：1~16）。このたとえは、天の国は賢い乙女たちが入るところという理解に対して根本的問いかけをしているのではないのでしょうか。社会に評価されるか、評価されないかできめる常識的価値観とは違うことを指摘しているのではと思います。

- 4、このような観点から、解釈を提示される方はすくなくならずいます。この世は、役に立つかどうかで人を評価します。イエスさまは、神の国は、この世の業績主義、成果主義のありようとは違うと言っているのではないかと。補給用の油を持っていた乙女たちは、気働きのできる気の利いたひとだったのでしょう。それはそれで素晴らしいことです。しかし同じ役割をもって招待された友人と油を分け合わなかったのは、自分の役割だけに忠実なだけだったような気がします。他の人を出し抜く、ずるがしこさ、抜け目のなさにも見えます。世は、補給用の油を持ってきた人を素晴らしい、気働きのできる人とその結果で評価するでしょう。経営の神様と言われた、松下幸之助（私もビジネスを携わっていた時には、彼の書をいつも愛読していました）が、こんな話をしていました。“社外のひとから仕事を頼まれる。それをできる人に伝えお願いします。ふつうはここで仕事はおわる。しかしこれではだめで、依頼した人に電話して、今日これこれの人にお願ひしましたと連絡を入れるようではなくては、人の信用を得ることはできない”とっています。このくらいの気働き、配慮ができなければだめだと言っているのです。頼まれたらすぐすること、そして頼んだ人にすぐ連絡することなどは、わたしも、いつも部下にはいっていました。この世の在り方はその通りだと思います。愚かな乙女たちは、夜中に走り回って油を得る努力をした人たちです。行進の道を照らし損ねたというだけで、祝宴に入ることを拒否されるのでしょうか。神さまが喜ばれるのはこのような態度でしょうか。相手が困っている状況を前にして、自分たちの役割を果たすことのみ

を優先し、相手と共に対処することをしない姿勢を指摘しているのではないのでしょうか。皆様はどのようにおもうでしょうか？

“神は人の歩む道に目を注ぎ、その一步一步をみておられる（ヨブ34：21）”と述べています。

- 5、このたとえ話は、神の国は賢い乙女が入るところということに問いかけをしているのでは。愚かな乙女を切り捨てる賢さ、社会で役に立つかどうかで決めるこの世の価値観の転換こそ求めているのではないか。この25章の最後のたとえ話で、主は、栄光の座に就くものは、“わたしが飢えていたとき食べさせ、のどが渴いていた時に飲ませ、旅をしていた時に宿を貸し、裸のときに着せ、病気の時に見舞い、牢にいたときにたずねてくれたからだ。私の兄弟であるこの最も小さいものの一人にしたのは、わたしにしてくれたのである。”と述べています。

人はいつでも役に立つ者として生きられるわけではありません。神の国は、この世で愚か者とされる人、弱者とされる人を決して排除しないのではないのでしょうか。

何時もともにいてくださる主を思い、今週も神の言葉を握りしめて歩みましょう。